関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

臨床の「知」・統計の「知」・教育の「知」

著者	田中 俊也，下山 晴彦，田畑 治，南風原 朝和，子安 増生，戸田山 和久
雑誌名	日本心理学会第68回大会発表論文集
ページ	S10-S10
発行年	2004-09
URL	http://hdl.handle.net/10112/4320

S10　臨床の「知」・統計の「知」・教育の「知」

企画者	関西大学	田中俊也
企画者	東京大学	下山晴彦
司会者	関西大学	田中俊也
話題提供者	愛知学院大学	田畑　治
話題提供者	東京大学	南風原朝和
話題提供者	京都大学	子安増生
指定討論者	東京大学	下山晴彦
指定討論者	名古屋大学	戸田山和久 #

概　要

心理学における方法論的対立の典型であると考えられる臨床的な「知」と統計的な「知」の問題を，その背後の技術体系の違いを越えて共通に探る道を，科学についての心理学という視点に求め検討したい。

臨床家は徹底して統計的手法での「知」を嫌い，統計に軸足をおく実験系・調査系の心理学者は徹底して臨床的「知」の曖昧さ・恣意性を問題にする。両方の「知」には大きな乖離があり，ほとんど共通の言語を持たない「異惑星」人間同士の議論となる。

妙な妥協をして「通じ合った」まねごとをする必要はないが，両方の「知」の統合を要求する学校教育場面では，その見かけ上の対立は深刻なものとなる。両者の極端な例に「現象学的心理学」の手法と「統計的検定」の手法をとりあげ，そこに共通に横たわるものがあるとすれば，それは何かを本シンポジウムで探っていきたい。

臨床心理学の領域からは田畑氏に，臨床のフィールドにおける「～は～である」ことの認識の成立過程をお話いただく。

統計の領域では，ベイズの定理を日常生活に引きつけて，数値をいっさい使わずに統計的検定の基本的な「哲学」，有意性水準設定の恣意性などについて南風原氏に解説をお願いする。

実際の生活場面・学校での生活の中で問題となる「知」については子安氏から，「妄想と検証」のダイナミックスをお話いただく。

以上の話題提供のあと，一昨年，非常に魅力的な本をまとめられた下山氏（子安氏と共同編著『心理学の新しいかたち：方法への意識』（誠信書房））から，方法論的意識や意義の観点から指定討論をお願いする。また，科学哲学者の戸田山氏から，もっとも深い意味における「科学」や「探求」の論理という観点で全体の統括をしていただき，不毛な方法論的対立から学校教育の現場の混乱を回避する道を参加者とともに考えていきたい。